

大陸（中支）

あ 草 枕

—昭和二十年の元旦—

栃木県 鶴見貞雄

昭和二十年の元旦、私は中支派遣軍第十三師団山砲兵第十九連隊（鏡部隊隊長石浜勲大佐）、通信分隊の二等兵として、揚子江に近く洞庭湖を望む湖南省岳州（岳陽県）の教育隊で迎えた。

前年の九月、仙台の第二師団の留守隊に現役兵として入隊し、数日後、門司港から玄海灘を渡り釜山に上陸、貨物列車で鴨緑江を経て北京、南京を経由し、この地、岳州で初年兵教育を受けていたのである。

その当時、すでに大東亜戦争の戦局は苛烈を極めていたが、わが中支派遣軍の士気は軒昂たるものであった。わが山砲隊では軍馬はとくに重要な兵器であり、教育隊にも二百頭に近い軍馬がいたと記憶している。

この教育隊で二度目の厩舎当番で年末から勤務していた私は、助教のN上等兵と受け持ちの軍馬五頭と共に厩舎のなかで二十二歳の元旦を迎えたのである。

午前八時定刻に厩舎士官の点呼があり、点呼終了後厩舎前に当番兵全員が整列、宮城遙拝捧げ銃、宮庭に翻る「日の丸」に捧げ銃、「君が代」奉唱、軍人勸諭五箇条の斉唱を終わり、厩舎士官の訓示の後朝食である。霜のきびしい朝であった。

同期に入隊した初年兵のほとんどは、新潟、宮城、福島

たが、生まれて初めて馬を扱う私は、寝蓐、馬糞の掃除や水飼いなどで蹴られたり嘔まれたり苦心はしたものの、これからの前線の戦闘を思い、努めて軍馬と共にいることを心掛けたので、馬もだんだんと懐き、乗馬も教練以上のものを習得することができた。

当時の思い出のひとつとして、教育期間も終わりに近い三月、班長当番勤務の時のことである。初年兵を引率して演習に行った班長の個室の清掃、衣類などの洗濯を終わり、入浴用のドラム缶にクリークから水を運んでいた時である。空襲警報のサイレンが鳴り響くと同時に、轟音と共に低空で飛来した敵機P51三機の機銃掃射の襲撃である。

とっさに班長室に飛び込み鉄兜をかぶり、班長の軍刀と凶囊を抱え、地上に炸裂する銃弾の中を防空壕に向かって駆ける私を、将校か下士官とでも思ったのであろうか、超低空で執拗に銃撃してくる。無我夢中で堅穴式防空壕に転がり込んだが、壕の周辺におびただしい銃弾が白い曲線を描いてきて炸裂する。

壕の中から見ると、黒い飛行帽の敵兵が機上から手

を振りながら飛び交っている。そのうちに付近の高射砲隊から対空砲の音が間断なく聞こえてくると、敵機は高度を上げて飛び去って行った。

この日の損害は、焼夷弾の直撃による兵舎の損壊と軍馬十数頭であったとのことであるが、私は壕から這い出る時には不覚にも五体がコチコチに硬直してしまっていた。生死の瀬戸際に立った初めての経験であった。

また教育期間に「楓橋夜泊」の詩で有名な蘇州の「寒山寺」や「岳陽樓」を見学したことは楽しい思い出となった。

月落烏啼霜滿天 江楓魚火對愁眠

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船

帰隊した夜宮庭でひとり吟じ、祖国と家郷を遠く想んだ。

教育隊における教育期間が終わり、四月に入ると、いよいよ前線に進撃中の本隊への追及行軍が開始された。一頭の鞍馬を挽き歩兵銃・通信機材・糧秣などを愛馬「青嵐号」に積み、身には背囊、鉄兜、帯剣、銃弾と手榴弾二個を帯びる。

すでに制空権は失われつつあったので、全行程が夜行軍で、日没と共に進発し、夜明けに大休止となり野営である。

敵戦闘機の機銃掃射、新四軍（現中国共産軍）の追撃砲による奇襲、峻険の登行や渡河、膝を没する泥濘悪路の雨中行軍など、まさに人馬一体の悪戦苦闘を経ること三カ月半にして、戦線縮小のため前線から撤収した第十九連隊本部によりやく合流したのは七月中旬で、湖南省衡陽の山中であった。

それから反転作戦と行軍、そして終戦、長沙城外の一夜では死の思い、洞庭湖畔における武装解除、愛馬「青嵐号」との訣別、日本軍馬飼育指導のため国府軍との五十日間におよぶ行軍、芦山北麓の捕虜生活、痔疾による野戦病院入院、戦友の病死、帰隊と連隊本部の復員業務の勤務などを経て、上海から復員船に乗船、奇しくも誕生日である昭和二十一年六月三日佐世保へ入港したのである。

長崎県佐世保市南風岬はえのさきに上陸し帰郷したのであるが、この間終戦の日から教えて十カ月であった。五十年は

茫々たりといえども、目をつむれば、戦野の山河今もなお、わが眼底に彷彿として去来するのである。

洞庭湖畔賦

茫茫四十五星霜 枯骨啾啾岳陽道

山河不变青一色 洞庭湖畔哭薰風

—平成三年五月、現地慰霊の旅にて—

支那事変当初の

太原攻略戦

島根県 足立 信義

現役兵当時

私は京都の御所で昭和天皇の御即位の大典のあった昭和三年の現役兵です。全国民が御慶祝に沸き立った年でした。

当時の現役兵の教育訓練は平時の厳格な訓練で、内務は想像に絶するつらいものでした。